

# 挿花水楊法

こむかひ

前號「切花の取扱」と題して、下らぬ事を申上  
 ましたが、是より「挿花水楊法」と題を改めまし  
 て御紹介致します事は、或斯道に熱心な人が世に  
 挿花の秘傳とか秘密とか稱へて、容易に人に教授  
 しなかつたり、又は、其教授を乞はんとするには  
 料金として數金を取るゝなど云ふ事を非常に不  
 本意に思ふの餘り其實験した所を惜しげもなく、  
 或物に書表はされた一節でございます。前置は此  
 位にして、いよ／＼本文にかゝりませう。

一年を眞行草の三つに分けますと、舊五月の夏  
 至から秋の彼岸に至る迄を、眞の時候と致します  
 此季は大陽に當り、陽中陰と申して凡そ生ある者  
 は外に陽氣を發し、内に陰氣を含む、故に衰ふる  
 ことおほ、養を得ること少いので草木も亦其通りで  
 衰ふる事多し。

陽と云ふは暖とか熱とか云ふ事で、陰と云ふの  
 は、寒とか冷とか云ふ事でございます。冷は養ふ  
 ことが少く、損ずることが多いものですから、此  
 季節に切た草木を養ふには、熱湯を以て致します  
 其養方は先づ薄鍋の様な物に水を入れ、之を烈火  
 にかけて、熱湯として之に其切た草木の株を一寸許  
 り浸し、根の色の白く變る迄煮るのです。(但花葉  
 は布巾で包み、湯氣のかゝらぬ様に注意がいりま  
 す)。充分煮えた時取上げ、直に水を盛つた桶の中  
 に挿込み、風の當らぬ様に、周圍を筵の様な物で  
 圍み、數時間捨置き、水の揚つた後取出し、煮え  
 朽ちた部分を切捨て、瓶に挿すのです。  
 尤、桶の中に挿込んだ草木は、四方から支を以  
 て直立させ、決して動かしてはいけません。  
 又夕方養つた物は、一夜、上部から、夜露を  
 取るのを最良と致します。

此養法を仕やうとする凡ての草木は、伐つて後  
 此法を施すまで、花葉枝共決して水に浸してはい

けません。

「行」の養は、春の彼岸から、舊五月夏至になる迄小陽の時候と、秋の彼岸から霜月冬至になる迄小陰の時候とに致します。此季は、寒暖共に等しく、和合の節でありますから、伐つた草木を養ふには、炭火を以て致します。

此方は先づ、火鉢の灰を四寸許九く掘り、其中へ烈火を積み上げ、中心に一寸餘の空洞を作り、其穴へ草木の株を五分程差入れ、炭になる迄焼きまして、其焼けた部分を切捨て、又々二回程焼きまして、冷水深く浸すのでございます。(以下眞の養法通り取扱ふのです)。

「草」の養法は、舊十一月冬至から春の彼岸になる迄でございます。此季は大陰に當り、陰中の陽でございます。凡て生ある者、外に冷氣を保ち内に暖氣を含みますから、損じ衰ふる事が少ない。是陰氣満つる時は陽氣之を補ひ、陽氣満つる時は陰氣之を冷し、寒は暖を以て出で、暖は寒を以て

退くと云ふ譯になります。

此季には草木の養は暖氣を禁じ、汲立の井水又は温灰、其他暖氣ある物は養ひになりませんから、伐た草木は冷水を盛つた桶の中に直立させ、風の當らない様に周圍を包み、浴喰場に一夜置くのを良いと致します。

以上で、眞行草の三通りの養法が終りました。

是から、各草木について一々擧げませう。其中に此三種の養法を、單に眞行草の養法とのみ、申す丈で一々委敷書きませんから、左様御承知をねがひます。

(一) 茎ぶき水揚法 初傳

極早天に切り、根を灰汁で充分煮込み、養え朽ちた所を切捨て、冷水へ深く入置き、水揚りたる後活けるなり。

又根に鹽を付けて焼き、活れる時花器の中に石灰を入れて置くも妙なり。

(二) 葉げい頭水揚法 初傳

極早天に切り、根を十文字に割り、熱湯に浸し、色變じたる時冷水に入れ置き、水揚りて後活るなり。

又根本を割り、硫黄を挟み、烈火にて焼くも妙なり。

(三) 鶏頭水揚法

初傳

前晚に切り、根本を三寸許り十文字に割り、其中へ山椒の實を挟み込み、熱湯にて煮込み、冷水に浸し、夜露を取り、翌朝活るなり。

(四) 吾妻菊水揚法

初傳

極早天に伐り、根に油を付て三十分許り炭火にて焼き、焼朽たる部を切捨て、冷水に浸し、水揚りて後活るなり。

(五) 鳥かぶと水揚法

中傳

朝早く伐り、根をたき割り、炭火にて焼き、冷水へ深く浸し、水揚りて後、挿すべし。

(六) 朝顔水揚法

中傳

暮方に明朝開くべき苔を見立て伐るなり。水揚

法は、深き湯呑茶碗に株を差入れ、又急須に上茶を入れ沸湯をさせ、右の茶碗一杯に注ぎ込むべし。随分あつき程よし。水揚りて後活るなり。

(七) 朝顔の客待ちの傳 (極秘傳)

前述の方法によりて二十分間程捨て置き、其上苔を、ぬれ紙にて巻き、竹又は萩の枯枝を、活る姿に撓め、朝顔を巻きつけ、釣瓶にさし、一夜井戸の中に釣し置く時は、花葉共工合よく、上を向くべし。翌日花器に移し、客の來る一時間前に苔の紙を取れば花開くなり。

又花器には甘茶を煎じ、さまして入れ置くべし。

(八) 時鳥草水揚法

初傳

極早天に伐り、直に切口へびんつけ油を付けて共儘根を焼き、朽ちたる所を伐り捨て、冷水に移し、水揚りて後活るなり。